

ダンス パフォーマンス公演

手レよむダンス

「霧、こんとんとたつて」

踊り 大西健太郎

二〇二二年十二月十日(土)、十二月十一日(日)



「まだわからない」といふことに対して、「まだわからない」ことを手放さずに対峙することはできるだろうか。自分の理や経験の範疇におさまらないこと、「何か」あると言いきれないものに出会おうとするこの瞬間を大切にしたい。

あるろう者の家族をもつ友人から聞いた。ろう者の家族には、そこで暮らす人の間では通じない「ホームサイン」というものがあるのだと言う。それ一つは手話(言葉)としての意味を持たず、関連する他の手話と合わせて使うことで伝わるのだそうだ。言葉の領域ではアクセスできない世界にも「手」は触れることができるのだろうか。ある特定の文脈や言語によって体系が生まれる前、人の「手」を介して伝わってきたも一つの「ことば」は、へどつながら水脈を描き起してみたい。

大西健太郎

なら歴史芸術文化村 滞在アーティスト活動交流事業 演劇発表公演
主催：なら歴史芸術文化村 滞在アーティスト活動交流事業実行委員会
(なら歴史芸術文化村・天理大学・天理市)
協力：一般社団法人CHISOU

踊りと「手レ譜(てれふ)」のよみかた

「手レよむダンス」は、手の動きや表情をもとにして作る踊りです。初期、絵を描かれた線や形を描き出すのびを使っ、なぞるようにならして作ります。画面に描かれた線は、踊りと踊りの場を結ぶもの。空間や風景のひろがりを感じさせ、描かれています。そして、絵からよみとったさまざまな形、線の太さ、筆致、リズム、スピードなどが、手を通して身体全体へとつながり、そこに踊りの情が生じます。本作は、奈良の土地にゆかりのあるさまざまな人、場所、風景、作業などをモチーフに描かれた「手レ譜」をもとに制作されました。吉野の手書き和紙、墨や筆の職人さん、大西野菜や漢方薬野家の農家さん、柿やイチゴの畑、考古学研究、文化財修復、遺跡調査や古墳の修復作業、など、それらに、大きく、大きな、奈良の土地と人の「手」が関わる場にならぬように、空間や風景のひろがりを感じさせ、描かれています。

ここでは、いくつかの「手レ譜」とそれにあてた踊りの様子、実長情などをあわせてお話し、つけて紹介します。片手、両手、全身に連なる動きなど、手からはさまざまな踊りの展開が想像できます。

農家さん、柿やイチゴの畑、考古学研究、文化財修復、遺跡調査や古墳の修復作業、など、それらに、大きく、大きな、奈良の土地と人の「手」が関わる場にならぬように、空間や風景のひろがりを感じさせ、描かれています。

ここでは、いくつかの「手レ譜」とそれにあてた踊りの様子、実長情などをあわせてお話し、つけて紹介します。片手、両手、全身に連なる動きなど、手からはさまざまな踊りの展開が想像できます。
